できることは自分で。できないことはみんなで助け合って。

あちこちに手の加えられた車いす。「家族の温かさ」があります。

介護保険でホームヘルプサービスを利用する家族から伺いました

東台にお住まいのAさん

Aさんは男性で、右半身が不随です。要介護度は五、奥さんと二人で暮らしています。ヘルパーさんには、毎日朝八時三十分から九時三十分までの一時間と、夕方に三十分お願いしており、負担額は一ヵ月およそ一万円とのことです。身体介護と家事援助の折衷型です。ヘルパーさんも太鼓判を押すほど仲のよいご夫婦でした。

サービスの内容は、朝はおしりをふき、奥さんの用意した朝食の食事を手伝ってもらいます。その後、歯磨きをして奥さんが洗っておいた洗濯物を干します。また、夕方にはおむつ交換をお願いしています。奥さんは腰が曲がってしまい、高いところに手が届きません。ヘルパーさんにそれを補ってもらっているのです。週に一度入浴も手伝ってもらいます。Aさんはときどき発作を起こすそうですが、いつでもすぐに近所のかたが来てくれるそうです。とても親切なかたばかりで「遠くの親戚より近くの他人」とても助かると笑って話してくれました。「今は年金と貯金で生活していますが、なくなると大変」「私が病気になったらどうしよう」など、心配は消えません。

小釈迦内にお住まいのBさん

Bさんは男性で、要介護度は五、週に一回四十分程度の訪問看護を受けており、血圧を測定してもらうほか車いすに乗せて散歩をしてもらうそうです。負担額は一回約八百円程度だそうです。

普段の介護は奥さんがしていますが、力の必要なときには隣に住んでいる息子さんに手伝ってもらっているため、要介護度が高い割にホームヘルプサービスをあまり利用していないケースです。

真中にお住まいのCさん

Cさんは一人暮らしで、要介護度は一です。週五日はヘルパーさんにお願いし、残り二日は娘さんが手伝いに来ているとのこと。十時から十二時までの二時間で食事のしたく、洗濯、掃除などをしてもらいます。週に一度の入浴を合わせて月額三千円程度と低料金なのは、Cさんが特別対策として負担額の軽減を受けているため、向こう三年間の自己負担額が三%になっているからだそうです。

福祉の充実を 年老いて年金生活

三百六十五日、一対一で介護するというのは並大抵のことではありません。介護する人は気の休まることがありませんし「いつも胸の中がもやもやしている」と言います。介護される人はもっと大変でしょう。長生きをして最後は「ピンピンコロリ」と思っていたのに心ならずも…死にたくても死ねないとまで話します。また、半身不随になると慣れるまで時間がかかるようです。いずれにしても、介護する側とされる側の、心と体の負担をいくらでも減らしてくれるこのヘルパー制度はとてもいいことだと感じました。

望みは「ピンピンコロリ」ですが、寝たきりになったときの心構えも必要なのではないでしょうか。最初に家の中にヘルパーを入れるのはとても抵抗があると思います。でも、恥ずかしがらずに人様の世話になることも頭において最後までしっかりと生きていたい、そう思いました。取材に協力してくださった皆様に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。